フリガナ	イム ハウン
氏名	林　河運
学位	博　士（文　学）
学位記番号	新大院博（文）第３５号
学位授与の日付	平成２０年３月２４日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当
博士論文名	日韓の対面言語行動の対照研究 ―ポライトネスの観点から―
論文審査委員	主　査　　教授　舩城俊太郎
	副　査　　教授　大石　強
	副　査　　教授　佐藤徹郎
	副　査　　准教授　藤石貴代

博士論文の要旨

本論文は、Brown & Levinson(1987)のポライトネス理論の理論的不備を修正し、新しい視点から日韓の対面会話におけるポライトネスの類似点・相違点を分析・記述したものである。

本論文の構成は以下の通りである。

第１章　序論
第２章　本論文の理論的枠組み
第３章　調査方法と分析方法
第４章　「初対面会話の質問による話題導入」とポライトネス
第５章　「初対面会話の自己開示による話題導入」とポライトネス
第６章　「初対面会話のオーバーラップ発話」とポライトネス
第７章　「友人同士会話のオーバーラップ発話」とポライトネス
第８章　「友人同士会話の話題導入」とポライトネス
第９章　終論と今後の課題
＜参考文献＞
別冊付録Ⅰ　会話資料
『日本人同士の初対面会話』：＜会話 1＞～＜会話 10＞
『韓国人同士の初対面会話』：＜会話 11＞～＜会話 20＞
『日韓接触の初対面会話』：＜会話 21＞～＜会話 30＞
『日本人同士の友人会話』：＜会話 31＞～＜会話 40＞
『韓国人同士の友人会話』：＜会話 41＞～＜会話 50＞

『日韓接触の友人会話』：＜会話 51＞～＜会話 54＞

『韓国人同士の初対面会話の日本語訳』：＜会話 11＞～＜会話 20＞

『韓国人同士の友人会話の日本語訳』：＜会話 41＞～＜会話 50＞

第１章では、本論文の位置づけ、研究目的、本論文の構成について述べている。

第２章では、従来の研究成果を検討し、その問題点を指摘し、本論文における「ポライトネス」の定義、「ポライトネスの代表的なパターン」と「ポライトネスの法則」について述べている。従来のポライトネスの概念は、主に聞き手に対する配慮に重点が置かれる傾向があり、ポライトネスに関わる言語表現行為は、ポジティブ・フェイス（他者に自分の欲求を認めてもらいたいとする立場）に働きかけるもの（＝ポジティブポライトネス）と、ネガティブ・フェイス（他者に干渉されずに自分の領域を守りたいとする立場）に働きかけるそれ（＝ネガティブポライトネス）との、いずれかに単純にカテゴリー分けされていた。しかし、実際の会話では話し手と聞き手の両方の立場に考慮しながら話している場合や、同じ言語表現行為でもポジティブ・フェイスとネガティブ・フェイスの両方に注意を払っている場合が頻繁に観察されることから、「ポライトネス」の定義を「円滑な人間関係を確立・維持するために、談話の中で会話参加者が相互のフェイスに注意を払うこと」であると定義し、「ミックスポライトネス」という概念を導入している。このように新しく定義した結果、従来では検討されなかったフェイス組み合わせのパターンにどのようなものが可能であるか、そこになんらかの法則性があるのかが新しく分析されることになり、第４章以下の各会話場面の分析からそのことが明らかにされている。

第３章では、調査方法と調査対象、また、文字化の方法とデータの収集方法に関して説明している。

第４章から第８章では、具体的な会話場面で従来の不備を補った形の分析を導入し、日韓のポライトネス表現の違いを新しい視点から説明している。

例えば、第４章の「『初対面会話のオーバーラップ発話』とポライトネス」では、話し手Ａが話をしているときに聞き手Ｂがあいづちや質問をはさむというようなオーバーラップ発話をした場合、日本人、韓国人ともに重ね手と重ねられ手の両方のフェイスに注意を払うミックス・ポライトネス・ストラテジーを使うが、日本人はあいづちを韓国人よりも多く用い、重ねられ手の話の調子に合わせ、重ねられ手のネガティブ・フェイスにより注意を払うストラテジーを用いている。これに対して、韓国人は実質発話を日本人の２倍以上用い、会話を自ら主導的に導くオーバーラップ発話を用いており、韓国人は重ねて自身のポジティブ・フェイスにより多くの注意を払うストラテジーを用いることを明らかにしている。従来の研究、例えばBrown & Levinsonの枠組みでは、「初対面会話のオーバーラップ」はネガティブ・ポライトネス・ストラテジーというカテゴリーに属すことになり、日韓のストラテジーの差が見えないことになるが、重ね手と重ねられ手の両方のフェイスを考慮して分析することにより差が明らかになるとしている。

第９章では第２章で修正された理論に基づいて分析された第４章から第８章の成果が再整理され、まとめて述べられている。主なポライトネスの法則性をあげると、

（１）話し手が自分のフェイスに注意を払う場合はミックスポライトネスをつかうことはない。

（2）ミックスポライトネスが現れる場合は、話し手のフェイスと聞き手のフェイスで反対のフェイスに注意を払う場合か、聞き手の両方のフェイスに注意を払う場合のいずれかである。

（3）話し手のフェイスと聞き手のフェイスが同じポジティブ・フェイスどうしで注意を払われたり、（喧嘩などポライトネスが存在しない場面を除き）同じネガティブ・フェイスどうしで注意を払われたりすることはない。

（4）多くの会話場面で、日本人は相手のネガティブ・フェイスを考慮するストラテジーを多用し、韓国人は自身のポジティブ・フェイスを考慮するストラテジーを多用するという違いがある。

最後に、今後の課題として、インフォーマントの数をさらに確保すること、今回は言語ストラテジーに焦点を合わせたが、非言語ストラテジーも分析できる調査方法も工夫すべきであることが述べられている。

審査結果の要旨

本論文は、Brown & Levinson(1987)にはじまるポライトネス理論の理論的不備を修正し、日韓の会話におけるポライトネスについて新しい分析を行ったものである。

本論文の評価できる点は次の通りである。

（1）従来の西欧中心の分析を、日韓のポライトネスにも適用できるように不備を修正したこと。

（2）理論的不備を修正した結果、日韓のポライトネス・ストラテジーに、従来見えなかった違いが理論的裏付けを伴って明らかになったこと。

（3）フェイスを話し手側と聞き手側の両方から相互的に見ること、聞き手の単一のフェイスだけでなくポジティブ・フェイスとネガティブ・フェイスの両面から見ることから、上記第９章にまとめられているように、フェイスの組み合わせパターンなどの法則性がはじめて検討されたこと。

本研究はやっと新しい研究の基盤構築が行われたばかりである。今後の課題としては、「ミックスポライトネス」の説明にさらに工夫すること、インフォーマントの数だけを確保するのではなく、男女のそれを色々な年齢層にわたり確保して、様々な場面で調査分析を継続していく必要があることなどが挙げられる。

本審査委員会はこれらの評価にもとづいて、本論文が博士号の請求論文として十分な内容を有すると認定した。さらに、本論文は言語学の専門性の強いものであることから、授与する学位は博士（文学）が妥当であるという結論に達した。